
バカと恋愛とAクラス

まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと恋愛とAクラス

【Nコード】

N1463Z

【作者名】

まり

【あらすじ】

バカテス二次創作です 振り分け試験の時に倒れて退席扱いになった女の子を助ける明久 その行為が認められたのか明久がAクラスに！ 超鈍感な明久がおくる学園恋愛ストーリー

振り分け試験

振り分け試験時

ガタっ バタンっ

明久「っ！大丈夫っ！？」

教官「退席すると無得点扱いになるが、それでもいいかね？」

明久「そんなっ 体調不良で席をはずすだけで……（あっ そうだ）

先生 『僕は』退席します」

教官「そうか なら他の生徒の邪魔にならないように早く教室から
でるんだな」

明久「よつと じゃあ失礼します」

ガラガラ ピシヤ

（とりあえずこの娘を保険室に移動させて……）

？「あのっ すいません私のせいで、あなたまで巻き込んでしまっ
て……」

明久「気にしないで それより今、最後の総合試験だけど名前、書
いてあるよね？」

？「？ はい 書いてありますけど」

明久「そう（ニヤリ）なら僕に任せてよ」
？「????？」

倒れた娘を保険室につれていった後

ガチャッ 「失礼します」

学長「おや？いまは試験中の筈だが？」

明久「そのことについてお話にきました」

学長「なんだい？」

明久「僕は退席しましたが一緒に教室からでた娘は今、テスト用紙に書いてあるぶんだけで採点してほしいんです」

学長「却下さね 退席は無得点扱いにするのが規則さ」

明久「でしょうね ……でも

今からそれを覆してやる」

沈黙…

明久「えっ ちょっとは反応してくださいよ」

学長「いや、だから規則は規則だし覆すなんてムリさね」

明久「やってみせますんで聞いてからでも……」

学長「わかったわかった 早く話しな」

明久「では…… 実はあの娘は退席していません」

学長「自分が勝手に連れてった とでも言う気かい？ それでもだめさね 理由はどうあれ教室からでた時点で退席さ」

明久「バカなっ！ 考えが読まれた！」

学長「バカだね 誰でもわかるよ それだけなら帰りな」

誰にでも分かるだと？ バカな！？ これしか方法がなかったのに！

学長「“観察処分者”らしいバカ度だね 西村先生も苦勞するよ」

何も此処で観察処分者っていわなくて……

カンサツシヨブンシヤ？

明久「それだっ！」

学長「（ビクッ）なっなにさね！」

明久「学園長は召喚獣制度を作った本人ですよ？ まだ改良するつもりはありますか？」

学長「いきなりさね……まあ改良できることがあるならするが……」

明久「なら観察処分者の僕が手伝います」

学長「……！ 続けるさね」

明久「観察処分者の召喚獣は他の召喚獣とは違う なら実験台にするには一番な筈です」

学長「それと退席扱いの取り消しで交渉しようってことかい？」

明久「はい」

学長「

……交渉成立」

……っへ？

明久「マジですか!？」

学長「ああ そのかわりコキ使うよ？」

明久「ありがとうございます」

学長「用はそれだけなんだろ？ さっさと帰りな」

明久「はいっ！ 失礼します!」

ガチャッ バタンっ

(いよっしややああああ!?!?!?)

ヤバイ!なんかめっちゃ良いことしたよ!?!?すぐくね!?!?あぁなんかいい夢見れそ……

ちなみに僕もついでに退席を取り消してもらったのを家に帰ってから気づきました

プロローグ(前書き)

前回はつとーこー

今回にかいめー

まだまだ恋愛にはなりません

プロローグ

僕が文月学園に入学して二度めの春がきた　……が正直感慨深くもない　今頭にあるのは、今年一年戦い抜くための戦友がいる場所　――ークラスが気になっていた

鉄「吉井！？おはよう」

明「なんで驚くんですか！？」

鉄「いやっ　お前がこんなに早く来るなんて思わなかったからな　つい……」

明「ああ大丈夫です　昨日ベタに眠れなかったんです　おかげで朝食はバッチリです！」

鉄「その言葉には生命の危機が感じられるが……」

明「えっ？　そうですか？」

鉄「……（たまにコイツの常識がわからん）」

明「????？」

何を鉄人は考えてるんだ？

明「鉄人　それより早く振り分け試験の結果をグツファあああああ　ああ！」

鉄「さりげなく鉄人と呼ぶな！　西村先生だ！」

明「だからって本気で殴ることは……」

鉄「んっ？　まだ七割だが？」

明「（ガタガタガタガタ）」

鉄「まあいい ほら受け取れ」

明「あっありがとう…」…ぞいます」

コイツ…… やっぱり鬼だ それはさておき振り分け試験の結果を受け取る

鉄「吉井、一ついっておく 学園長にまで掛け合ったそうだが、それは学園的には異例で正しくはないことだ」

明「…… すいません」

鉄「反省してるならいい しかしお前のした行為は人間的に正しい行為だ 胸を張ってもいい」

明「……！」

鉄人が誉めた！？バカな！そんなことがあるのか！？

鉄「よってお前はFクラス行きのところをAクラスだ よかったな」

はい？

いまなんて？

ブログ（後書き）

短い……

つてことで毎日三回更新を予定しております
多分もっと書けると思うけどとりあえず……

感想まっています

設定（前書き）

明久・オリキャラ設定

まあこんなもんでしょうか？

設定

吉井明久

2年Aクラス

観察処分者

総合点 700～900

得意科目 日本史・世界史(100～150)
苦手科目 全て

原作と違う点

- ・ 姫路に好意をもっていない
- ・ キレルたまにある
- ・ 頭がよくなる

オリキャラ

洲上院 紬 (すじょういん つむぎ)

2年Aクラス

総合点 2500～3000

得意科目 英語・数学
苦手科目 日本史・世界史

容姿

家庭教師ヒットマンリボンの十年後ラル・ミルチの目が優しくな
った感じ

胸はEカップ

召喚獣

白いドレスに連射式アームガン（腕に装着するタイプ）

弾一発につき一点消費

腕輪の能力

ホーミング

弾一発につき十点消費して誘導弾を撃つ

振り分け試験の時に助けてくれた明久のことを想っている 明久と
話すとき顔が赤くなりショートするときがある 翔子や愛子、優子
には想い人がバレーでいて後をおしてもらっている

設定（後書き）

短いけど一日三話更新改め、長いのを一回更新します

今後ともよろしくお願いします

いざAクラス？（前書き）

今回優子との会話だけに……

すいません

いざAクラス？

明「うわー ここがAクラスかー 最新式パソコンに個人空調機、個人冷蔵庫まで…… 教室っていうよりむしろホテルっていうような気が……」

Aクラスの教室の前で窓ガラス越しにAクラスをのぞき込む 端から観たら覗きをしている変態にしか見えないが……

？「ちよつと！ そこでなにしてるの!？」

明「うわあっ!?! すいませんごめんなさい 許してくださいって…… 秀吉？」

優「私をあんな愚弟といっしょにしないで！ わたしは双子の姉、木下優子よ!」

明「木下優子さん？ そういえば秀吉にお姉さんがいるってー」
優「そ・れ・よ・り!」

明久の言葉を遮って優子は疑問を聞き出した

優「なんでAクラスを覗いてたわけ？ 観察処分者の吉井君？」

明「えっ？ えつと…… 実は僕A「嘘ね」クラスにって最後まで言わせて！ しかも嘘ってひどくない!？」

優「どうせ嘘言うだろうからね 先に潰しておこうと思って」
明「……」

優「どうせAクラスの設備を見に来たんでしょーけど、それより先に自分のクラスにいったらどうかしら？ 覗きをしている変態にしかみえなかつたわよ？」

明「……」

優「吉井君はどうせバカの巣窟のFクラスでしょ？ 努力もしない

のにAクラスの設備を見て羨ましがるなんて…… この設備は努力した人「うるさい!!!」たちのみ……え?

明「聞いてれば上から目線にしか話さない、人の話を最後まで聞かない、嘘だという 何様のつもりなの? 自分が優等生なら自分より下の人を侮辱するの? それこそバカのことだね」

優「なっ……!」

明「別に覗いてたことは否定しない 僕がバカでどうせFクラスだと思つのも仕方がない ……けどそれは人を侮辱する理由にはならない」

優「くっ……! 何よ観察処分者の癖に! 私はあなたより真面目で正しい行為をしてきた優等生よ!」

明「じゃあ不真面目で間違つた行為をしてきた観察処分者の僕と同じクラスだと知つたら?」

優「そんなことあるわけー」

ピラッ

僕は言い終わる前に自分の所属するクラスが書いてある紙をみせた

優「ー!?!?」

明「人の上にたつことは人の模範になることじゃないの?」

優「!……そうね」

明「だつたら……一緒に頑張ろうよ」

優「……ええ ごめんなさい 私ムキになっちゃった」

明「あはは それはお互い様だよ 僕の方こそごめんね」

優「でも、謎が一つできたわ」

明「謎?」

優「ええ なんで吉井君はAクラスなの?」

ああ 謎ってそれね

明「えっとね それは……」
優「（ズイッ）それは？」

いきなり近づくかないで！ 木下さん綺麗だからドキドキするんですけど！ 顔も赤く……あっ離れてった なんか嬉しいやら悲しいやら

優「早く教えてよ」
明「それは

……僕にもわかりません！」

……沈黙

優「(スタスタ ガチャ バタン)」
明「ちよっ!? スルーはなしで! スルーは無しでおねがいしま
すっうっうっうっうっう!!」

いざAクラス？（後書き）

会話面倒ですが呼んでくれた方、ありがとうございます

次はAクラスで自己紹介させます　そこで明久がAクラスな理由も

Aクラスの理由（前書き）

結構書いたと思います

こんな感じでどうですか？

Aクラスの理由

木下さんにスルーされたので僕も教室に入り席に座りました

ガチャ バタン

高「皆さん進級おめでとうございます 私はこの2年Aクラスの担任、高橋洋子です よろしくおねがいします」

先生が来たみたいです

えっ？いきなりすぎる？作者さぼんな？

作「すみません」

高「ー設備に不備のある方はいますか？」

これであるっていうほづがおかしいでしょ

高「それでは自己紹介をしてもらいます 代表の霧島さんからどうぞ」

霧「……霧島です」

短っ！

高「次からは廊下側から順におねがいします」

.....

Aクラス生徒「ーです よろしく」

次僕だ

高「次、吉井君お願いします」

明「はい 吉井明久です 気軽にダーリンってよんでください」

シーン.....

.....寂しくなんかないからね！

Aクラス生徒「吉井って確か観察処分者だったよな？ なんでAクラスにいるんだ？」

明「僕にもわかりません」

シーン

痛い！みんなの視線が痛い！

高「吉井君がAクラスにいる理由は最後に話します」

先生！ナイスフォロー！

高「といっても次の方が最後なんですけどね」

前言撤回 今の一言はいららないです

高「それでは最後の方……あれ？ いませんね どうしー」「遅れてすみません！」あつ来たようですね」

遅れて来たのは女の子だった ……あれ？ あの娘どこかであったような気が？

高「自己紹介中でしたのでお願いします」

洲「はい 洲上院絢です よろしくおねがいします」

高「洲上院さんは吉井君の後ろの席に……いえ ついでですので吉井君がAクラスにいる理由をお話します」

あつ やつとわかるみたい

高「実は吉井君は、この洲上院さんが振り分け試験の時に倒れたのを助けて、学園長に退席無得点扱いを取り消してもらったように説得したんです」

ほえ？ 助けた？ そんなことー

ーしてたね

高「その行為について職員全員で検討したところ吉井君をAクラス

にすることになりました」

Aクラス生徒「それだけでAクラス入りですか？　なんかずるいで
す」

失敬な！ずるいとはなんだ！　……いやずるいな　かなりずるいと思
う

高「吉井君は観察処分者になるほどのバカです」
明「ヒドいっ！！！」

高「ですがそんな吉井君が人助けなんてするとは思えません　吉井
君はバカで単純で周りに流されやすいです　今までの行為は周りに
流されたからだと推測します」

確かに雄二に騙されっぱなしだったかも

高「なら周りが優秀なAクラスなら吉井君もまともになる筈です」

おお！　なるほど！

高「多分……」

えっ？　信用無い？

高「よって吉井君はAクラスになりました」

………

あれ？みんな納得いつてない？

高「それだけでみんなが納得できないのもわかります 色々邪魔にならないか 特に試召戦争において」

orz 否定できない自分に嘆いている

高「安心してください 吉井君は試召戦争で邪魔になりません いまから証明します 霧島さん吉井君前へできてください」

? 何をするんだろ?

高「二人には模擬試召戦争してもらいます 総合では差が大きいので…… 吉井君、得意科目はなんですか?」

明「へっ?じゃあ日本史で」

高「わかりました 承認します 試^{サモン}獣召喚してください」

「「試獣召喚《サモン》」」

Aクラス 霧島翔子

日本史 381点

VS

Aクラス 吉井明久

日本史 157点

高「では始めてください」

Aクラスの理由（後書き）

つぎは戦闘シーンです

うまく書けるかな？

Aクラスはいい人がいるみたい(前書き)

一日おいてしまいました

すみません(シヨボーン)

本編どうぞ

Aクラスはいい人がいるみたい

高「それでは始めてください」

相手は学年主席の霧島さん 点数の差が大きいけど勝算はある

明「一瞬で決める！ きなよ霧島さん」

霧「……」

霧島さんの召喚獣が日本刀を構えて突っ込んできた それに合わせて僕の召喚獣も突っ込ませる 僕の武器は木刀だから普通に斬り合えば負ける

キーン ガツ ザクツ

僕と霧島さんの召喚獣の陰が合わさった そして霧島さんの召喚獣が仰向けに倒れていて僕の召喚獣が首に木刀を突き立てていた

Aクラス全員「……えっ？」「……」

明「僕の勝ちだね」

霧「……（コクリ）」

召喚フィールドが消えて僕たちの召喚獣も消えた

Aクラス生徒「なっなんで代表が負けたんだ？ 点数は0になっ
ないの？」

高「召喚獣にも人間と同じ急所があります 吉井君はその一つの首
を狙ったんです」

ああなるほど……

Aクラスのみんなも納得したみたい

Aクラス生徒「でも、代表の方が点が高かったのにどうしてあんな状況に？」

明「それが観察処分者の唯一の利点かな？」

僕はみんなに観察処分者はフィードバックと操作技術について話して

明「霧島さんの召喚獣の刀をいなして、刀の柄の底を木刀で叩いて飛ばしたんだ」

真っ直ぐに来たものは下からの攻めには弱いからね　と補足説明

高「これで吉井君が邪魔にはならないということがわかったと思います」

それぞれがお互いの顔をみてうなずき合っている　みんなもわかってくれたみたいでよかったよ

高「以上で説明を終わります　では授業を始めましょうー」

p r r r r r r r p r r r r r r r

高「はい高橋ですが………

…わかりました　FクラスがDクラスへ試召戦争を仕掛けた用です
授業は取り消して自習とします　各自自習をしてください」

そういつて高橋先生は教室を出ていった

僕も席に戻ろうー

洲「あのっ！」

ーーと思ったら声を掛けられた

明「ああ洲上院さん 何？」

洲「あのっ 振り分け試験の時はありがとうございました」

明「えっ？ 別にたいしたことしてないけど？」

洲「そんなことないです 学園長にまで直訴したんですよ 規則は絶対なのに……ほんとうにありがとうございます」

そういつて頭を下げる洲上院さん なんか必死な所が可愛かったり

明「どういたしまして それより体調はもう大丈夫なの？」

洲「はい おかげさまで大丈夫です」

明「そう よかった（ニコツ）」

洲（カアアアノノノノノ）「（カツコいい）」

明「？ 顔が赤いけどホントに大丈夫？」

明「（ちよつと心配だなあ 熱があるのかな？）」

そう思つて洲上院さんの額を触つてみた

洲「ひゃあ！（シュー ボンツ！ バタンツ！）」

明「ちよつ！ 洲上院さん！？ だめだ動かない とりあえず席まで運ぼう」

よいしょっ てくてく

倒れた洲上院さんを席に座らせた リクライニングシートだったからボタンを押してできるだけ横になれるようにしておいた

明「（僕が触ってから倒れたってことは僕のことを嫌いだから？）」

フツ 別にいいんだ 気にして……ないもん！

悲しみに耐えている僕の前に明るいう声がやってきた

愛「やつほー吉井君 さっきのすごかったね」

明「えっ？ えっとー？」

愛「ああ僕？ 僕は工藤愛子 一年の終わりに転校してきました 趣味は水泳と音楽鑑賞でスリーサイズは上から78・56・79で 特技はパンチラ、好きな食べ物はシュークリームだよ よろしく」

最後あたりがおかしかったような…… それにしてもなんか……

明「工藤さん 今の特技の所……」

愛「信じられない？ なら見せてもいいよ？」

そういつて彼女はスカートの端をつかんだ 正直みたいけど僕が聞きたいのはそんなことじゃー

明「そうじゃなくて何であんなこといったのになって……」

愛「だからホントに特技としてー」

明「嘘でしょ？ それ」

愛「えっ？」

明「僕には興味をもってほしい、自分を見てほしいって感じに見える」

愛「！……そんなことは」

明「一年の終わりに転校してきたって言ってたし友達も少ないんじゃない？ だからあんなこと言ったんじゃないの？」

愛「……」

明「ダメだよ 軽々しくそんなこと言ったら」

愛「……」

明「あつなんかゴメン 説教みたくなっちゃった」

愛「大丈夫 気にしてないし それに大正解だよ ホントはちょっと寂しかったんだ」

明「だつたらさ」

愛「？」

明「僕が工藤さんの友達になるよ だからさ、特技は言わないでね」

愛「へっ？」

明「嫌ならいいんだけど……」

人の言うことにとやかく言う気はなかったのに…… これで嫌われたら洲上院さんと合わせて二人に嫌われる そんなことになったら僕は……

愛「別に嫌じゃないけど…… ホントに友達になつてくれる？」

明「もちろん！」

愛「ありがとう！ これからよろしくねアッキー」

明「あつアッキー！？」

愛「愛称だよ いいよね？」

明「うん よろしくね」

僕は手を差し出した 工藤さんはちよつと赤くなってたけど手を出してくれた 二人でした握手は短かったけど友達ができたせいがかんじられた

明「（Aクラスにはいいひとがいるみたいだな……）」

僕はそう感慨深く思った

Aクラスはいい人がいるみたい（後書き）

今回は明久と愛子の会話が作者は好きです

つぎはこれまでのFクラスのくだりです

Fクラスでは……（前書き）

明久が翔子と戦っているときのFクラスの話です

どーぞ

Fクラスでは……

Fクラスではー

雄「明久の奴はまだ来ないのか…… 初日から遅刻かよ」

まあ明久なら仕方ないか…… たぶん目覚ましの電池が切れて起き
れなかったんだろう Fクラスは明久を入れて50人ーつまり明
久がFクラス最後の一人

雄「そして試召戦争における最大のワイルドカード あいつさえい
ればAクラスにも勝てる」

待ってやがれ翔子

雄「にしてもホント遅いな いったい何やってんだ？」

ガラガラ

福「すいません遅れました みなさん席に着いてください」

来たのは中年の頼りなさそうなオッサンだった

福「それでは廊下側の人から順に自己紹介をしてください」

秀「木下秀吉じゃ 演劇部に所属しております」

秀吉か…… あいつの演技力はすごいからな 役に立ちそうだ

康「……………土屋康太」

ムツツリーニもか 情報収集と保険体育なら誰にも負けないからな
こいつも切り札になる

島「……………趣味は吉井明久を殴ることです」

島田までいるのか 数学だけはBクラス並にあるからな 主力として使える

雄「後は明久なんだが……………まだこないのかー」

ガラガラ

雄「やっときたかバカカー」

瑞「遅れてすいません！」

なっ！ 姫路だと！？ なんで学年主席争いをしている姫路がなんでFクラスに！？

F生「質問です なんでここにいるんですか？」

聞きようによつてはかなり失礼だが俺も聞きたかったことだ

瑞「えっと 振り分け試験の時熱をだしてしまつて……………」

なるほど それで姫路はここにいるのか にしても思わぬレアカードが入ったな 姫路さえいればいくらでも戦況を変えることができる

雄「んっ？　そういえば明久がない」

あいつはどこにいるんだ？

雄「おいっ　ムツツリーニ」

康「……………何か用？」

雄「明久がFクラスにいない　あいつは今どこにいるか調べてくれ」
康「……………了解」

そういつて何かの機材（どうせ盗聴のдарう）をイジリ始めた

康「……………わかった　明久はAクラスにいる」

雄「はあ？　あいつがAクラスに？　あの野郎…………」

一人Aクラスで幸せってかー

福「坂本君あなたが最後です」

雄「ああ　代表の坂本だ　好きなようによんでくれ」

俺はあいつの幸せがー

雄「みんなにいつておく　FクラスはAクラスに試召戦争を仕掛け
ようと思っ」

ー　大っつっつ嫌いだ！！F生「勝てるわけないだろ」

F生「これ以上設備を落とされたくない」

F生「姫路さんがいればそれでいい」

雄「いやっ　勝てる　今からそれを証明してみせる」

俺は秀吉、ムツツリーニ、島田、姫路を示し4人の強さを言った

F生「これならホントに勝てるかもー」

F生「そしたらリクライニングシートだ」

F生「姫路さん結婚してください」

雄「おまえ等には悪いが勝っても設備を入れ替えることはしない」

F生「はあ？ なんでだよ？」

雄「おまえ等にはわかってないかもしれないがここにはいるべき奴
ー 観察処分者の吉井がいない」

ザワザワザワザワ

みんな気づいたのか騒ぎだしている

雄「あいつはAクラスにいる Aクラスの女子といちゃついてな」

瑞・島「ゴゴゴゴゴ」

FFF「」「異端審問だ」「」

雄「だから勝利した時、人員トレードをしてFクラスにひきづり落
とす」

FFF「」「そしてボコボコに!!!!」「」

雄「ならばペンをとれ！ あいつにこれ以上幸福をあたえるな！」

FFF「」「うおおおおお!!!!」「」

準備はできた 明久…… 覚悟しやがれ！

そしてFクラスはDクラスに試召戦争を仕掛けた

おまけ

愛「あれ？ アッキーご飯食べないの？」

明「いやっ 実はお金がなくて……」

愛「じゃあ僕がお弁当作ってこようか？」

明「えっ！？ いいの!？」

愛「うん まかせてよ」

明「なら僕はデザートにシュークリームをつくってくるよ」

愛「それホント!? 絶対だよ！」

優「二人とも何はなしてるの？」

愛・明「ああ実はー」

優「愛子だけずるいよ 私にもつくって」

明「あはは 別にいいよ」

A男・女「何の話してんだ(るの)？」

そんな感じにAクラス全体に広がっていった最後にはみんなにプチシュークリームをつくることになった そのおかげでAクラス全員と仲良くなれました

Fクラスでは……（後書き）

明久…明 愛子…愛 優子…優 翔子…翔 洲上院…洲 雄一…雄
秀吉…秀 ムツツリー…康 島田…島 姫路…瑞

とします

Aクラスの恋模様（前書き）

愛子視点

オリキャラを差し置いて愛子がリード？

Aクラスの恋模様

放課後、明久がみんなにプチシュークリームを作るために早く下校した後

優「愛子、吉井君と随分仲良くなったわね 何かあったの？」

愛「ちよつとね 僕の特技のことで……」

優「あれは止めなさいっていったでしょ？」

愛「アッキーにも言われちゃったよ」

優「それで？」

ぼくはその後のアッキーと話したことを優子に教えた

優「あー 愛子、気づいてあげられなくてゴメンね？」

愛「あはは 気にしてないよ 優子もぼくの友達になってくれたし」

優「吉井君はすごいわね 愛子の気持ちに気づくなんて」

うん ホントにすごいと思う 今まで誰も気づいてくれなかったのに、アッキーは気づいてくれた

愛「（嬉しいな）」

優「愛子？」

愛「あっ ゴメン優子」

優「吉井君に惚れてるのはわかってるけど私を無視するのは止めなさい」

愛「ゆっ優子！？／／／／」

優「バレバレよ？ ついでに言っとくと多分洲上院さんも……」

やっぱりそうだよな

愛「でも負けなよ!」

優「友達として応援するわ 頑張りなさい」

愛「うん! ところで優子 優子って料理得意?」

優「いきなり何?」

実はアッキーにお弁当をつくってあげるんだ

愛「料理が得意なら男の子が好きな食べ物くらい知ってるかなって」

優「残念ながら得意じゃないわ」

愛「そっか」

優「でも吉井君ろくに食べられないほどお金がないんでしょ? だ

つたらたくさん食べられるならすごく喜ぶと思っつわよ?」

愛「なるほど! ありがとうと優子」

優「わっ! くつつくのは止めなさい!」

よーし いっぱいつくってアッキーに喜んでもらっぞ!

翌日の昼

愛「アッキー 約束のお弁当だよ(ドンッ!)」

明久「こんなにたくさん!? ありがとう(ニコッ)」

愛「ノノノノ」

明「じゃあ、はい シュークリーム」

愛「あれ? ぼくのだけ大きくない?」

明「シュークリーム好きだっていつてたし、お弁当つくってくれたしね」

嬉しいよアッキー！

愛「いただきます（パクッ）おいしい！」

明「よかった そういつてもらって」

プロ級かと思っちゃったよ よくみたらみんなも顔がほころんでるし
すごいねアッキーは

明「あはは クリームついてるよ？」

愛「えっ？ どこどこ？」

明「ここ」

そういつてアッキーはクリームをとってペロツと嘗めた
あれ？ それぼくの顔についてたやつじゃ……

愛「／／／／／」

明「（パクッ）工藤さんのつくってくれたお弁当も美味しいよ」

愛「ホント？ ありがとう」

明「うん 工藤さんの彼氏になる人は幸せだね」

愛「／／／／／ アッキーは天然だね」

明「そつかな？」

愛「うん それよりアッキー」

明「何？」

愛「ぼくのこと、工藤さんじゃなくて愛称で呼んで欲しいな」

明「じゃっ 愛ちゃん」

愛「早っ！！！」

明「僕も愛称で呼んだ方がいいかなって思ってたからさ 昨日考え
たんだ 愛ちゃんていいよね？」

愛「／／／／／…うん／／／／／」

こうしてぼくたちは愛称で呼びあえるようになりました

愛「(ホントに天然だな)…でも)」

そんなアッキーがぼくは大好きです!

Aクラスの恋模様（後書き）

いまごろですが駄文です

愛子と紬 どっちを明久とカップルにさせようかなー

つてことで投票してもらいたいです

1 愛子

2 紬

次回は紬との絡みにしますので今回と比べて投票してください
締め切りはA対Fが完結するまでです 締

お手数かけますがよろしくおねがいします

Aクラスの恋模様2（前書き）

細視点

どーぞー

Aクラスの恋模様2

洲「はあ……」

思わずため息がでてしまう。その理由は私の想い人、吉井明久君の態度である。

吉井君は私がAクラスで倒れたとき自分は嫌われていると勘違いしたみたい。まあ熱を計ろうとしたのに倒れたら嫌われていると勘違いしても仕方がない。

洲「（でも、あからさまに私から離れるのはイヤだよ。悲しいよ）」

思い切って私から話しかけてみようかな？ それでも離れられたらどうしよう……。最近は工藤さんと仲良さそうにしていますし。

洲「でも……。やっぱり いやでも ……はあ」

明「洲上院さんどうしたの？ ため息なんて……」

洲「実は吉井君が私のことを……って吉井君！？ えええ！？ / / / /」

明「あつゴメンね。急に話しかけて。で僕がどうしたの？」

洲「いやっ。あのっ。そのお（ぼそぼそ） / / / /」

明「（やっぱり僕って嫌われてるのかな）話したくないならいいから。じゃあ」

洲「あつ！」

私が引き留める前に吉井君はいつてしまいました。……もっと話したい。一緒に居たいのに……。

工藤さんの様にできないなあ。

洲「はあ……………」

翔「……………どうしたの？」

洲「えっ？ あっ代表」

翔「……………吉井のこと？」

洲「ええ！？／／／／／　　なんで!？」

翔「……………私も苦労してる」

代表が？　容姿端麗　成績優秀　性格も優しい代表が苦労？

そんなこともあるんですね

洲「代表……………私どうすればいいんでしょう？」

翔「……………これを使うといい　効果は適面」

スタンガン20万ボルト　手錠　鎖（鉄球付き）

洲「……………」

翔「？……………どうかした？」

洲「やっぱり自力でがんばってみます」

翔「……………そう」

代表は席へ戻っていった

束縛が強すぎですよ代表　そして代表の想い人さん、ご苦労さまです

雄「!？」　なんかいま急に癒された気がする……………」

とうとう放課後まで何もできなかったです 私は帰宅路をあるいて
います

洲「はあ…… どうすればいいんでしょう」

不良A「ねえねえ その娘」

洲「えっ？」

不B「うっほー かわいいー」

不C「今ひま？ ひまだよね？ 俺らと遊ばない？」

洲「いえっその 私いますぐ帰らなきゃならないので」

何この人たち 怖いよお

不A「いいじゃん少しくらい」

不B「なあ もうどっかつれてってヤっちまわね？」

不C「そうだな なあおとなしくこいよ（グイッ）」

洲「いやっ！ やめて！」

怖い怖い怖い怖い怖い助けを助けて助けて助けて助けて助けて

……

不A「さっさとこいよ？なあ？」

洲「いやです！ 放してください！」

不B「そういわれると放したくなくな（バキッ）ぐあっ！」

不A「なっ！？ 誰だテメエ！」

えっ？ 誰か助けてくれた？ 誰？

明「あつ？ テメエ？」

洲「吉井君！？」

明「やあ洲上院さん」

洲「なっなんで吉井君がここに！？」

明「あはは まあちよつと待っててよ」

不A「おいコラ！ 何なんだテメエはよ！」

明「おいおい テメエって言ったか？ ……コロスヨ？」

不B「くそっ！ さっきはよくも！」

明「雑魚あいてにするのって嫌いなんだよね さっさと済ませようか？」

不C「コイツ！ なめんじゃねえ！（ダッ！）」

ブンッ スカッ

明「遅い」

バキッ ドカッ ドスッ グチャ？

不A「なっ！？ コイツつええ！」

明「悪鬼羅刹の悪友をなめんなよ？」

不B「何？ 悪鬼羅刹だと？」

不A「勝てる訳ねえ 逃げるぞ」

明「逃げるの？ できないよそれは」

バキドスドスポキ？ドゴ「やめっ」バコ「死っ」ブンガシャンバタ
ゲシゲシ「……」

明「弱！」

不良だった肉塊？はつみかさねられました

明「洲上院さん 大丈夫？ 怪我とかない？」

洲「私は大丈夫です でも何もされなかつたんだしあそこまでしな
くても……」

明「僕の大切な人に手をだしたんだ 当然の報いだね」

洲「たつ大切な人つて／＼／＼／」

明「うん 洲上院さんは僕の大切な人だよ 嫌われてるけど」

洲「それは誤解です」

明「ほえ？」

私は吉井君が助けに来てくれてそれで少し意識してて恥ずかしくて

洲「だから倒れたんです」

明「なんだ 嫌われてないんだ」

洲「いえっ むしろ……その」

明「？」

洲「（みっ見られてる／＼／＼／）」

明「恥ずかしがり？」

洲「／＼／＼／」

明「洲上院さん 君のことがわからない だから君のことを知るた
めに友達になつてほしい」

洲「……友達」

これは一歩吉井君に近づけたんですよね？

洲「私も吉井君と友達になりたい 仲良くなりたい」

明「よかつた じゃあよろしくね（ニコッ）」

洲「／＼／＼／ よつよろしくおねがいします」

明「とりあえず呼び方変えない？ なんか堅いよ」

洲「明久君！」

明「早!!!」

洲「前から考えてたんです」

明「なんかデジャブ」

洲「明久君 私のこと呼んでください」

明「じゃ紬ちゃん」

洲「紬ちゃん／＼／＼」

明「ダメかな？」

洲「ダメじゃないです!」

明「そう？」

洲「はい!」

明久君と名前で呼べる仲に 嬉しいです 工藤さんとはどう呼びあつてるんでしょう？

洲「明久君 工藤さんのことはどう呼んでるんですか？」

明「愛ちゃん」

洲「……………」

明「なんで落ち込んでるの？」

だって愛称でよんでるなんて もうそんな仲なんですか？ 教えてほしいです

洲「明久君と工藤さんの仲って……………」

明「友達だよ」

洲「……………（ぱああああ）」

明「なんで喜んでるの？」

洲「なんでもないです」

まだ私にもチャンスがあるんですね それだけで嬉しいです

明「そろそろ遅くなってきたし帰ろつか？」

洲「はい！」

その日明久君は家まで送ってくれました …… あれっ？ 明久君が
あそこにいた理由聞くの忘れてました まあ明日聞きましょう せ
つかく友達になれたんだし

洲「お礼にお弁当でも作ってあげよう」

料理は得意ではないですが頑張ります！ まっててください明久君

翌日、愛子と紬のお弁当両方を食べることになった明久でした

Aクラスの恋模様2（後書き）

ただ今カップル投票

愛子 3票

紬 0票

です

がしかし新たに

二人とも 2票

この3の中から選んでください

明久とAクラスとお料理教室（前書き）

明久視点

どーぞー

明久とAクラスとお料理教室

愛「そういえばアッキーって前にシュークリーム作ってくれたよね
アッキー、料理できるんだ」

明「まあね 今は一人暮らしだし、基本なんでもつくれるよ」

紬「なら何で自分でお昼つくってこないんですか？」

明「紬ちゃんには言っただけじゃなかったっけ？ 実はあまりお金がないんだ
まあ今ならあっても作ってこないと思うよ」

愛「えっ何で？」

明「だって毎日かわいい女の子二人がお弁当作ってきてくれるんだ
もん 二人が作ってくれるお弁当すごく美味しいしね」

愛・紬「／／／／／」

僕は愛ちゃんと紬ちゃん、交互にお弁当を作ってきてもらってます

明「そうだ！ 明日は僕が二人にお弁当作ってくるよ いつものお
礼に」

愛「アッキーが？」

紬「私たちに？」

明「そう」

愛「確かにシュークリーム美味しかったし……」

紬「でもお金がないんじゃない……」

明「二人のおかげで少しは余裕あるから大丈夫だよ」

愛「ならお願いしようかな？」

紬「そうですね お願いします」

そうして僕は二人のお弁当を作ってあげることになった

翌日の昼

明「はい 二人とも」

愛「ありがとー ぼく楽しみだよ」

紬「じゃあ いただきますしょうか」

愛「そうだね いただきます（パクッ）……………」

明「愛ちゃん？ どうしたの？」

紬「（パクッ）……………」

明「ええっ！？ 紬ちゃんまで！？ もしかしてまずかった？」

愛「すごく美味しいけど……………」

紬「何故か自信がなくなります……………」

明「????？」

あれ？ 美味しいって言うてくれたけど、二人ともどうしたんだろ？

優・翔「（…………）二人ともどうしたの？」

明「霧島さんに木下さん」

愛「これ食べたらわかるよ……………」

紬「明久君が作ったんです」

優「吉井君が？（パクッ）……………」

翔「………… 優子？（パクッ）……………」

明「二人ともどうしたの!？」

優「愛子がいった通りだわ……………」

愛「でしょ…………？」

翔「………… 吉井」

明「何？ 霧島さん」

翔「………… 私たちに料理を教えてほしい」

どうしたんだろ急に？ そんなに美味しかったのかな？

明「僕はいいけど……誰かに作ってあげるの？」

翔「（コクリ）……夫の雄二に」

明「霧島さん 僕の聞き間違いかな？ いま雄二って言った？」

翔「……………」

霧島さんは顔を赤らめた せうなんだ…… 雄二にねえ……

愛「アッキーどこいくのって何でナイフなんかもってんの!？」

明「ちよつとFクラスへ雄二を始末しに……」

羨ましいぞ雄二！ 霧島さんみたいな美人が妻だなんて！ 殺す殺す殺す殺すうううううううううう!!!

愛「だめだよ そんなことしちゃ（上目遣い）」

紬「そうですねよ 止めてください（涙目）」

明「ぐはあ！」

二人とも可愛すぎる…… 僕を殺せるほどの威力だなんて ああ何か川が見えるような……

翔「……吉井？ 大丈夫？」

明「……はっ！」

優「大丈夫みたいね」

翔「……先生に調理室の使用許可をもらった そこを使う」

全員「了解（はい）（ええ）」

放課後

明「まず料理の基本から 料理に大事なのは味見だよ 味をみて自分が美味しいって感じれば誰にでも基本、美味しいって言ってもらえる」

愛「でもどうすれば美味しくなるかわかんない？」

明「そうだね でも料理つてその味はだいたいわかるでしょ？ それに近づけるようにすればいいんだよ」

全員「……なるほど」「」

明「その訓練のために 定番のカレーを作ってもらおうかな？」

紬「辛さはなんでもいいんですか？」

明「もちろん それと最後にルーに入れるものを考えといてね」

優「どうして？」

明「それが一番のポイントだからね」

みんな作り始めたみたい 小鍋に作るから材料はそんなにいらぬい

愛ちゃんは中口

紬ちゃんは甘口

木下さんは中口

霧島さんは激辛香料ハバネロをどさつて……

明「霧島さん！？ いれすぎ！」

翔「……そう？」

明「食べる相手のことを考えて作らなきゃ」

翔「……わかった」

気をとりなおして ふむふむ みんなカレーは作ったことがあるみたいだね順調だね

愛「アッキー 最後に入れるものって何にすればいいのかな？」

明「それじゃみんな火を弱めて聞いてね」

カチッ

明「最後に入れるもの それは何でもいいよ」

優「んー でも何を入れたらいいかわかんないわ」

明「じゃあ参考を言っと」

リンゴ、パイナップル、チョコレート、牛乳、コーヒー

明「これが代表的なものだね リンゴやパイナップルは酸で他の具をやわらかくする、チョコやコーヒ―は深みがでて、牛乳はまるやかになる」

翔「……以外と多い」

明「僕はオススメとして……これ」

紬「それチーズ？」

明「意外とおいしいんだよ まあ各自好きなものをいれてね」

愛「ねえアッキー」

明「何？」

愛「アッキーは何いれてほしい？」

紬「私も気になります」

明「？ なんて僕に聞くの？」

愛・紬「アッキー（明久君）に食べてもらいたいからだよ」

明「ほえ？ 何で僕なんだろ？」

優「（ホント鈍感ね）」

明「じゃあ僕はいろいろ試したから驚くようなものかな」

愛「難しいね」

紬「うーん……」

全員「」「できた!」「」

明「じゃあ試食させてもらっよ」「

まずは愛ちゃんのから

明「(パクッ)これ胡桃?」

愛「煎った胡桃をいれてみたら香ばしさが増すかなって…… どうかな?」

明「確かに香ばしさが増してる おいしい」

愛「そう? よかった」

紬「次は私のを食べてください」

明「いただきます(パクッ)えっとこれはソースだね」

紬「はい」

明「ソースの酸味とコクがでていいね」

紬「ありがとうございます」

明「じゃあ次は木下さん」

優「厳しくてもいいわよ」

明「自信あるね(パクッ) ? これは何? わかんないや」

優「私が入れたのは……アイスよ ソーダ味のね」

明「アイス!? なるほどだから清涼感があるのか これは驚いたね すごいじゃない木下さん」

優「吉井君が驚くようなのがいいって言ってたから考えたのよ?」

明「僕のため? なんか嬉しいな ありがとうございます(ニコッ)」

優「なっ／／／／／」

愛「優子!?!」

紬「木下さんまで!?!」

優「ちっちがうわよ／／／／／」

明「? 何の話?」

聞いたけどみんな教えてくれませんでした なんの話だったんだろ

？ ちなみに霧島さんは誰かに食べさせにいったらしくもついなが
った

明「みんなおいしくできるじゃないか 真剣にやればみんなできる
んだね 僕が教えることなかったかな？」

愛「そんなことないよ？」

紬「そうですよ 勉強になりました」

優「ありがとね 吉井君」

明「どういたしまして」

時間も結構経つてたので帰ることになった 多分みんな好きな人が
いるんだろつな だからあんなに一生懸命に作ってたんだと思う
みんないったい誰が好きなんだろ？

翌日今度は木下さんがお弁当をつくってきてくれた それから三人
で順番にお弁当を作ってきてくれることになった

おまけ

翔「……雄二、食べて」

雄「いきなりできてなんだ？ カレーかこれ？」

翔「……雄二の為に作った」

雄「どれ（パクッ）おおっ！ うまいじゃねえか！」

翔「……よかつた」

雄「いったい何入れたんだ？」

翔「……隠し味にトカゲの尻尾を」

雄「ブーーーーー！！！！」

明久とAクラスとお料理教室（後書き）

ついに優子まで！？って私がかいたんですけどね

ただいま

愛子 4票

紬 0票

両方 12票

です あと飛び入りで優子も投票できるようになりました

増えてしまつて申し訳ありません 今後もよろしくおねがいます

VS Cクラス(前書き)

優子視点

小山悪 明久キレル？

どーぞー

V S Cクラス

バンツ！

小山「木下優子はいる!？」

そう言つてAクラスに入つてきたのはCクラス代表の小山さん 私に用があるみたいだけど何かしら？

優「何かしら小山さん？」

小「木下さん さっきはよくも私たちCクラスを豚呼ばわりしてくれたわね？」

優「？ 何のこと？」

小「白々しい真似してくれるわね それならこっちにも考えがあるわ」

小「私たちCクラスはAクラスに試召戦争を申し込む!!!」

どうしたの!？ いきなり試召戦争だなんて

小「木下さん あなたを必ず補修室送りにしてあげる」

小山さんはそれだけ言い残して帰つていった

翔「……優子、Cクラスに何かしたの？」

優「代表、何もしてないけど」

愛「でも、あれは相当怒つてたね」

紬「そうですね あれほどとなるとよほどの何かがあったのでしょ
う」

明「でも木下さんには思い当たることはない」

優「うん」

いつの間にか私の周りにはいつものメンバーがいた

明「なら僕らがすることは一つ 戦争の準備をしなくちゃね 上位
クラスは下位クラスの申し込みを断れないからね」

翔「……吉井」

明「何？ 霧島さん」

翔「……私たちは無駄な戦いを避けるべきだと思っ」

確かに試召戦争のルールには下位の申し込みは断れないとあるけど、
代表の言うとおりその申し込みを破棄してもらえば私たちは戦いを
避けられる

明「無理だと思っよ？ だいたい何で怒ってるか想像がつくけどあ
れだけ火がついた小山さんはどれだけ説明しても聞き入れてくれな
いよ」

愛「確かにそうかも」

優「吉井君 想像がつくってどういうこと？」

明「何で小山さんが怒っているかわかったってことだよ」

紬「何でわかったんですか？」

翔「……教えて」

明「単純に考えると木下さんの双子、秀吉が何かしたんだろうね」

優「秀吉が！？」

翔「……雄二は優子の弟がFクラスにいたと言っていた」

明「女装した秀吉を使ってCクラスと戦争させたかったんだろうね」

優「あの愚弟……」

はっ！ いけない 思わず素がでちゃった 優等生を演じてきた私
があんなこと言うなんて知られたら……

明「たとえ説明できたとしてもCクラス全員がやる気みたいだし戦
争は避けられない」

愛「なるほどー」

紬「よくそこまで考えられましたね？」

明「あはは たまたまだよ」

たまたまだとしても、あそこまで考えついたのはすごいと思う 吉
井君はちゃんと成長してるみたい

翔「……吉井、私たちはどうすればいい？」

明「みんなの言うとおり無駄な戦いだから早めに終わらせる けど
雄二はCクラスと戦わせることでAクラスの情報が欲しいはず 腕
輪をもっている人たちを抜いて20人くらいで戦うべきだと僕は思
う」

紬「Aクラスで腕輪もちは……」

霧島翔子 工藤愛子 洲上院紬

紬「この3人です」

明「ならAクラス下位18人と僕、木下さんでやろう」

愛「アッキーもでるの？」

明「観察処分者だから操作技術はあるし、少しは点数もあがって
るだろうからね」

優「私もでるの？」

明「小山さんは木下さん狙いだからそこに戦力を注ぐはず 挟み撃
ちにして一気に片をつける」

翔「……わかった みんなに話しておく」

代表はみんなに話にいった 正直、関係ないのに集中的に狙われるなんて…… 憂鬱だわ

優「はあっ」

明「木下さん大丈夫？ 体調でも悪いの？」

優「大丈夫よ 心配させてゴメンね」

でもやっぱり憂鬱には変わらない うん！ 帰ったらあの愚弟を絞めよう！

放課後

明「じゃあ木下さん いこうか」

優「ええ」

ついに試召戦争が始まった やっぱりCクラスのみんなは私を狙ってくる

『いたぞ 木下優子だ！』

『よくも豚扱いしたな！？』

『補修室送りよ！』

優「Aクラス木下優子 数学で勝負します サモン《試召召喚》」

幾何学模様が床に現れ私の召喚獣がでてくる 西洋鎧にランスをもっている

Aクラス 木下優子
数学 304点

Cクラス×8
数学 平均150点

ランスをもって突進して何体かを消すけど少し攻撃を加えられて点数が減った

Aクラス 木下優子
数学 259点

明「Aクラス吉井明久 参戦します サモン《試召召喚》」

Aクラス 吉井明久
数学 122点

明「ゴメン あっち片づけるのに手間取っちゃった」
優「気にしないで 来るわよ」

私は召喚獣を構えさせた

ダッ

優「えっ！ ちょっと吉井君 まだあれだけいるのよ!？」

突っ込んだらダメ
そういう前に

シュツザクツキインドスツザシユツ

すでに私が残した敵の召喚獣を倒していた

優「すごい」

ハッキリいつてほればれするような動きだった　それも一瞬で急所をついている

明「終わったね　じゃあ次いこうか」

優「えっええ　いきましよう」

吉井君カッコいいな　前に愛子たちに好きなのか聞かれたときは違
うっていったけど、私は吉井君に少し引かれてる

好きなのかな？

Cクラス

小「戦況はどうなってるの？」

『木下優子と観察処分者の吉井が離れなくて木下をしとめられねえ』

小「なら私がでるわ　本隊も全員でて！　二人を違う教科で離して
戦わせるわよ」

『おう！　いくぜ！』

小「見てなさい木下優子　絶対にゆるさない！」

戦前

明「ついに本隊が来たみたいだよ」

優「いつそう気を引き締めなくちゃね」

明「そうだね」吉井明久に英語で勝負をしかける『来たね サポ！
トお願い」

優「わかつて」木下優子に世界史で勝負を！『えっ！」

Aクラス 吉井明久

英語 108点

Cクラス×10

英語 平均140点

Aクラス 木下優子

世界史 289点

Cクラス×10プラス小山

世界史 平均130プラス168点

明「しまった！ 離された！」

優「くう！」

私たちは分離されてしまった 一対多は正直キツイ

明「木下さん！ すぐにいくから耐えててくれる？」

優「そんなこと言われても」

敵は時間差で攻撃してきて少しずつ点数を削っていく 私も攻撃したけど2体しか倒せなかった こうなったら玉砕覚悟でいくしかないわね

優「いけっ！」

私の召喚獣はボロボロになった ところどころ傷がついている 小山さん以外の召喚獣は倒せたけど無傷の小山さんとならたとえ一対一でも勝てない

小「あら？ どうしたの木下さん？ Aクラスの割にもう戦死寸前じゃない」

Aクラス 木下優子

世界史 30点

Cクラス 小山

世界史 168点

吉井君は少人数なら勝てるけど多人数では分が悪いみたいで苦戦している

明「くっ！ 木下さんが待ってるのに！」

優「吉井君……」

吉井君 なんであんなに必死になって私を助けようとしてるの あなたには利益はないのに

小「そういえば木下さんって音痴なのよね！」

優「っ！……！」

小「おまけにBL好きな腐女子！」

優「小山さん！ 止めて！」

小「豚扱いされた私に比べればこれくらい当然よ！ そんな木下さんがAクラスなんてね！何かしたんじゃない？」

優「ううううう……！」

ぽたっ

涙がでた

よりによって吉井君に聞かれるなんて

小「そんな人を助けるのが観察処分者よ？ お似合いね」

明「おい その雑魚 …… 言いたいことはそれだけか？ それだ

けならもう喋るな 耳障りだ」

小「……はっ？」

明「木下さんを泣かせたこと ……後悔させてやる！」

Aクラス 吉井明久

世界史 241点

吉井君はいつの間にか相手を全滅させて私と小山さんの戦いに割って入っていた

小「なっ!? いつの間に!?!」

明「木下さんの悪口言ってたところから そんなことより始めない?」

小「くっ!」

勝負は一瞬で決した 点数に差があつたのにさらに操作技術も勝る吉井君に為す術なく小山さんの召喚獣は消えた

明「戦後対談

木下さんに謝れ!」

試召戦争はAクラスの勝利で終わり、戦後対談で仮代表として吉井君が小山さんを謝らせることで設備のランクダウンはやめてあげた

優「……吉井君」

明「何? 木下さん」

優「……小山さんが言ったことは本当なの」

明「……」

優「優等生の私に欠点があるなんて おかしいわよね」

明「へっ？」

優「へっ？」

明「小山さん？ 確かに何か言ってたような気がするけど戦ってて
わかんなかった でも木下さんが泣いてたから何かヒドイこと言っ
てるんだと思って罵倒したけど…… 何の話だったの？」

……

優「あなたバカでしょ？」

明「知ってる」

バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

でも今はそれが愛おしい

改めて思います

私、木下優子は

バカな吉井明久がー

優「ねえ吉井君 私も愛子たちみたいに名前とかでよんでもらえな
い？」

明「いきなりどうしたの？」

優「いいじゃない別に」

明「うーん 愛ちゃんはなまえの愛だけとってちゃんをつけたし
紬ちゃんはなまえにちゃんだし……

いつそなまえだけで優子でいいかな」

優「／／／／いいわよ なら私も明久って呼ぶから」

明「うん これからもよろしくね優子」

優「こちらこそ明久」

――大好きです

V S Cクラス(後書き)

獲票数の多い順に

両方	1 2
優子	5
愛子	4
紬	1

となっております

優子は後から参戦したので両方が一番だった場合 三人カップルにするかもしれません

感想を書いてくださった皆様

ありがとうございます

V S Fクラス 明久の怒り(前書き)

明久視点

どーぞー

V S Fクラス 明久の怒り

ガラッ

Aクラスに一人の女子生……男子生徒がきた

根「……Aクラス代表はいるか……？」

卑怯と名高いBクラスの代表、根本君が“女装”していた
根本君、君に何があつたんだい？

優「一騎打ち？」

雄「ああ Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを
申し込む」

優「うーん、何が狙いなの？」

雄「もちろんFクラスの勝利と……」

優「……と？」

雄「明久の不幸だ」

優「お断りよ」

雄「はええなおい！ もう少し考えろよ！」

優「代表、坂本君が会いに来たわよー」

雄「わかった！ やめろ！ やめてくれ！」

根本君がきた次の日、雄二はAクラスに試召戦争を仕掛けてきた
どーでもいいけど僕の不幸って何？

優「とりあえず理由を聞こうかしら？ 明久の不幸が狙いつてどういうこと？」

雄「バカで観察処分者の明久がAクラスで一人楽しんでるのが、悪友として許せ…… おい木下 いま明久って言わなかったか？」

優「ノノノノノ クラスメイトなんだし別にいいじゃない！」

雄「ほう そういうことか…… 他にも明久の想ってる奴いるんじゃないか？」

優「あなたには関係ないでしょ！」

優子が真っ赤になって雄二に突つかかっている 雄二はニヤニヤしてるし…… もし優子を傷つけること言ったらどうなるか つーか雄二にはやってもらわなきゃならないことがあった ちよっと行くかな？

雄「その反応からして何人かいるな ますます許せゴハアア!？」

明「やあ雄二ひさしぶり」

雄「明久てめえ何しやがる!？」

明「それはこっちのセリフだよ 君は何したかわかってんの？」

雄「何言ってるんだ？ バカはこれだから困るんだよ それより試召戦争の話だ 受けるのか、受けないのか？」

明「雄二 1対1の一騎打ちを5回、うち3回勝利したほうの勝ち これでどうか？」

雄「選択科目権はこっちがもらう方がいいか？」

明「霧島さんちよっと」

翔「……何？吉井」

明「実はさー」

霧島さんに試召戦争の戦い方を説明する

翔「……それは少しツライ……雄二」

雄「何だ？」

翔「……科目選択権はそっちが3回　一騎打ちで勝ったほうの言うことを一つ言うことを聞く」

雄「それは個人か？　全体か？」

翔「……個人」

雄「いいだろう　開始は明日の午後でいいか？」

翔「……（コクリ）」

雄「なら明日首を洗ってまってる」

雄二はそれだけ言って帰っていった　絶対勝ってやる　勝たなきゃいけないんだ

翌日の午後

雄「Aクラス　約束通りきたぜ？　始めようか？」

バカ雄二　確かに今は午後だけど……

ちよつど愛ちゃんからお弁当を受け取ってるそこだった

明「昼飯時にくるなバカ！」

雄「ああ！？　明久、おまえ何昨日からいきまいてんだ？」

島「吉井！　なんで女の子からお弁当なんでもらってるのよ！」

瑞「おしえてください！　吉井君！」

FFF「女子から弁当だと！？　吉井殺す！」

明「雄二　君にはやるべきことがあるだろ！　島田さん　君には関係ない　姫路さん　教える義務がない　その覆面集団　ヤルナラシヌツモリデネ？」

閑話休題 字あってます？

僕の言葉でorzとなった島田さんと姫路さん バカな覆面集団はボコツとききました

高「それでは第一回戦を始めます 代表のかた出てきてください」
優「私がいくわ」

こつちからは優子がでる あつちは秀吉か……

明「優子 ちょっと頼みがあるんだけど」

優「なに？」

明「相手に科目選択権を使わせて勝つてくれない？」

優「わかったわ」

高「科目は何にしますか？」

優「科目は譲るわ」

秀「そうかの？ なら古典をお願いするのじゃ」

高「わかりました それでは始めてください」

優「秀吉 そのまえにちよつといい？」

秀「ん？ 別に構わんが？」

優「なら外へいきましょ」

ガラッ

秀「何のようじゃ姉上？ ……なぜワシの腕をつかむのじゃ？」

優「Cクラスのこと あんたの所為なんでしょ？」

秀「あつ姉上 あれはホントにすまなかつたと思っそれ以上その閑節は逆に曲がらなー」

ガラッ

優「秀吉は体調が悪いから帰るって 代理だしてくれる？」
雄「いやっ うちの負けでいい……」

……聞こえなかったよ？ 優子が秀吉に関節をキメるわけないじゃないか 服についでるのは返り血じゃないよ……多分

とりあえず

A 1勝 F 0勝

V S Fクラス 明久の怒り2 (前書き)

前回同様明久視点

明久が壊れてます

V S Fクラス 明久の怒り2

高「第二回戦 代表のかた出てください」

愛「じゃあぼくがでるね」

明「頑張つてね」

Fクラスからはムツツリーニか……

愛「土屋君だっけ？ 随分と保険体育が得意みたいだね？ でもぼ

くだつてかなり得意なんだよ？ ……キミと違って、実技で、ね」

FFF「何？ 実技だと？」

あつ 覆面集団が復活した おかしいなあ 2、3時間は動けないように打ち込んだのに

愛「その人たち、ゴメンね ぼくには心に決まった人がいるから
／／／／／」

明「へえ 愛ちゃん好きな人いるんだ」

愛「（気づいてないんだ）はあつ」

明「????？」

愛ちゃんはこつちを向いてため息をついた どうしたんだろ？

高「教科は何にしますか」

康「……………保険体育」

やっぱりムツツリーニ最大の武器、保険体育を選んできたか

「「サモン《試獣召喚》」」

ムツツリーニは忍者に小太刀 対する愛ちゃんは

雄「なんだ!？ あのバカでかい斧は!？ 腕輪までしてるぞ!？」

制服に斧か……

愛「それじゃ、バイバイ ムツツリーニ君」

康「……………加速

……………加速終了」

Aクラス 工藤愛子

保険体育 446点

Fクラス 土屋康太

保険体育 572点

ムツツリーニの腕輪の効果、加速で愛ちゃんの召喚獣は倒された
ちよつと落ち込んでる 相手がムツツリーニとはいえ得意科目で負
けたのは悔しいみたい 慰めてあげよう

雄「これで1対1だな」

高「第三回戦 代表のかた出てください」

明「ちよつとまってください」

高「なんででしょうか？」

明「僕ら昼をまだ食べてないです いくら試召戦争とはいえ昼くらい
食べたいです」

高「そうですね では休憩として昼を食べてください」

明「だってさ いこうか三人とも」

愛・紬・優「うん・はい・ええ」

FFF「吉井殺す！」

明「はあっ ちよつと待ってて」

そろそろ本気で殺ろう

明「let's go to hell」

FFF「ぎゃあああああ！！」

明「これでよしっ」と

愛「アッキーおつかれ」

紬「あいかわらず強いですね」

優「それより食べましょ」

明「そだね」

瑞「あー」

島「ウチらも混ぜたっていい？」

そついつて姫路さんと島田さんがお弁当をもって僕たちの所へ来た

愛「姫路さんに島田さんだっけ？ ぼくは構わないよ」

紬「私毛」

優「一緒に食べましょ」

三人の言葉にほつとしたような顔をする二人が近くに座ろうとしたけどー

明「ダメだよ」

ー僕が却下した

瑞「！ どうしてですか？」

島「ウチたちと食べれないってこと!？」

明「仮にも試召戦争中だよ？ 戦略を聞こうとしてるかもしれないじゃないか それにー」

瑞「私たちはそんなことしません！」

島「そうよ！ ウチたちはそんなことしない！」

明「まあするにしろしないにしろ僕は二人と食べたくない 少なくとも僕は二人を……Fクラスのことを許してない……ゴメン 場が悪くなったね 僕の言ったこと気にしないでね それと愛ちゃん、せっかくお弁当作ってくれたけどいいや ゴメンね」

僕はそれだけ言ってみんなから離れた

明「何いつてんだ僕 いくら優子のこと謝らないからって二人にあたることなかったのに……」

僕の頭には優子が泣く姿が浮かんでいて、そうさせたCクラス代表の小山さん、小山さんを騙した事の元凶ーFクラスを許せない思いでいっぱいだった

明「……………」

Fクラスに勝たなくちゃ 勝って謝ってもらうんだ

Fクラスに勝つことだけに執着してしまった僕は、誰にも見せられないような狂気に満ちた顔をしていた

紬「あの、明久君 大丈夫ですか？ ーーー！」

明「紬ちゃん……」

紬「ちゃんに顔、みられちゃったか そんなに怖いかな？ でもこの顔は優子のためを思ってできた顔なんだ 変えることはできない
ゴメンね

明「ゴメン」

紬「すいません ちょっとびっくりしてしまいました」

明「ゴメン」

紬「明久君が謝らなくてもいいんですよ」

明「ゴメン」

紬「……明久君」

明「ゴメン」

V S Fクラス 明久の怒り2 (後書き)

投票結果はA対Fが終わるまで記載しません

その間も受け付けますのでよかったですら投票してください

V S Fクラス 明久の怒り3 (前書き)

明久してん

細との絡み？

VS Fクラス 明久の怒り3

紬「……明久君」

明「ゴメン」

さつきからゴメンしか言っていないよ でも何言えればいいかわかんないよ こんなときどうすればいいの？ 頭が痛い グルグルする
つらい 助けて

紬「……大丈夫ですか」

明「わ…かん…な…い」

紬「えっ？」

明「どうしたらいいかわかんない」

紬「何がですか？」

明「僕はどうしたらいいの？ こんな状態でみんなの前にでれない
話ができない」

紬「少し落ち着きましょう」

明「落ち着く？ なぜ？ 落ち着いてる余裕なんてないよ 戻らなきや
いつもの僕に みんなに会わなくちゃいけないんだ」

紬「……」

明「ねえ教えてよ 僕はどうしたらいいの？ 助けてよ 苦しいんだ
頭がグルグルしてる 気持ち悪い 早く元に戻らなきや 教えてよ 助けてよ」

ギユウ

えっ？ 何が起こったの？ あったかい 柔らかい いいにおいが
する それで

すく落ちて着く

紬「落ち着きました？」

明「紬ちゃん……」

紬ちゃんが僕に抱きついている

紬「はい」

明「ちよつとくつつきすぎ」

紬「／／／／／ごめんなさい」

明「でも、すごく落ち着く もう少しこのままでいてくれない？」

紬「／／／／／はい」

ギユウ

紬ちゃんは少し強く抱きついてきた

明「紬ちゃんて意外と大胆なんだね」

紬「明久君限定ですよ？」

明「ほえ？　なんで僕限定？」

紬「（やっぱり鈍感ですね）はあっ」

明「???」

あれ？　なんか僕言ったかな？　まあいいか……

紬「なんでもないです　そろそろいいですか？」

明「うん？」

紬「明久君は何を悩んでたんですか？」

明「えっ！　いやそのっ」

紬「Fクラスを許せないって何ですか？」

明「……絶対言わないとダメ？」

紬「ダメです 私にこんな恰好させてるんですよ？」

明「紬ちゃんからやってきたんじゃない？」

紬「別にいいじゃないですか」

明「まつ いつか」

紬「なら教えてください」

明「実はさ」

僕はCクラス戦で優子が泣いたこと 事の元凶であるFクラスが許せないことを話した

紬「……明久君はバカですね 一人で悩むなんて」

明「だって僕がもつとしつかりしてれば守れたかもしれないのに」

紬「優子ちゃんはそんなことに気にしないよ むしろ明久君の事をほめてるよ 最終的には助けたんでしょ？」

明「でも……」

紬「でも禁止 一人で悩むのも禁止」

明「はい すいません」

紬「わかればよろしい」

明「ありがとう 元気でたよ」

紬「ならご飯食べよ Fクラスに勝つんでしょ？」

そう 僕はFクラスに勝たなきゃいけない 今は背負ってる荷が降りたのか気分が楽だ これも全部紬のおかげだね 後でお礼言わなきゃ

ありがとうね

紬「ん？」

明「なっ何？」

紬「んー なんでもないです」

心の中で感謝したら振り向かれた まさかエスパー？ それにして
も振り向いたときの顔、かわいかったな

ドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキドキ

あれ？ なんか鼓動が？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1463z/>

バカと恋愛とAクラス

2011年12月15日02時48分発行